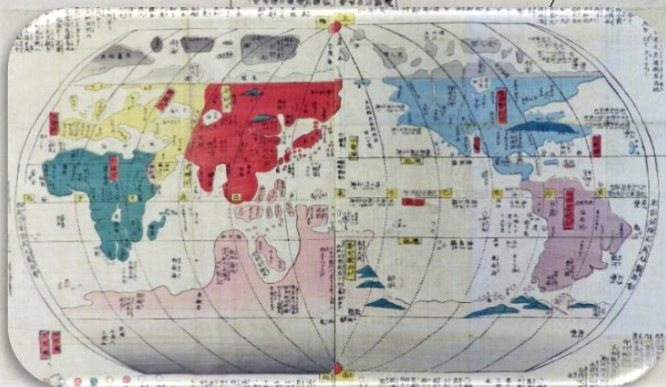
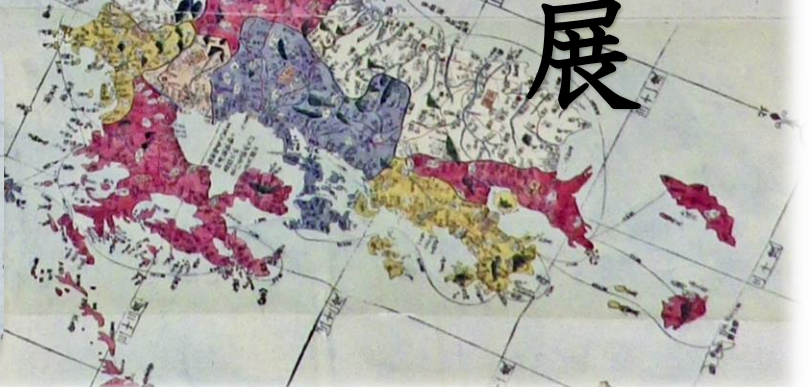


令和6年度秋季展
近世史料館所蔵
地図展

令和6年
10月8日(火)～
11月10日(日)
金沢市立玉川図書館
近世史料館



地球万国山海輿地全図説(21.2-136)

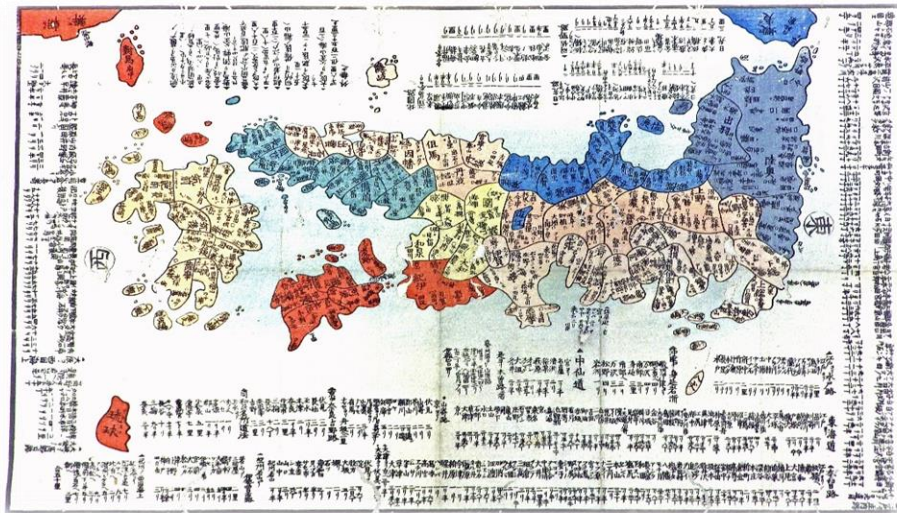


新刻日本輿地路程全図(13.9-34)

はじめに

江戸時代の日本地図といえば、文政4年(1821)に伊能忠敬らによって作られた「大日本沿海輿地全図」(伊能図)が有名である。しかし、それ以前にも江戸幕府が国絵図を用いて作成した日本地図が複数ある。

今回の展示では、当館が所蔵する日本地図や世界地図を紹介する。



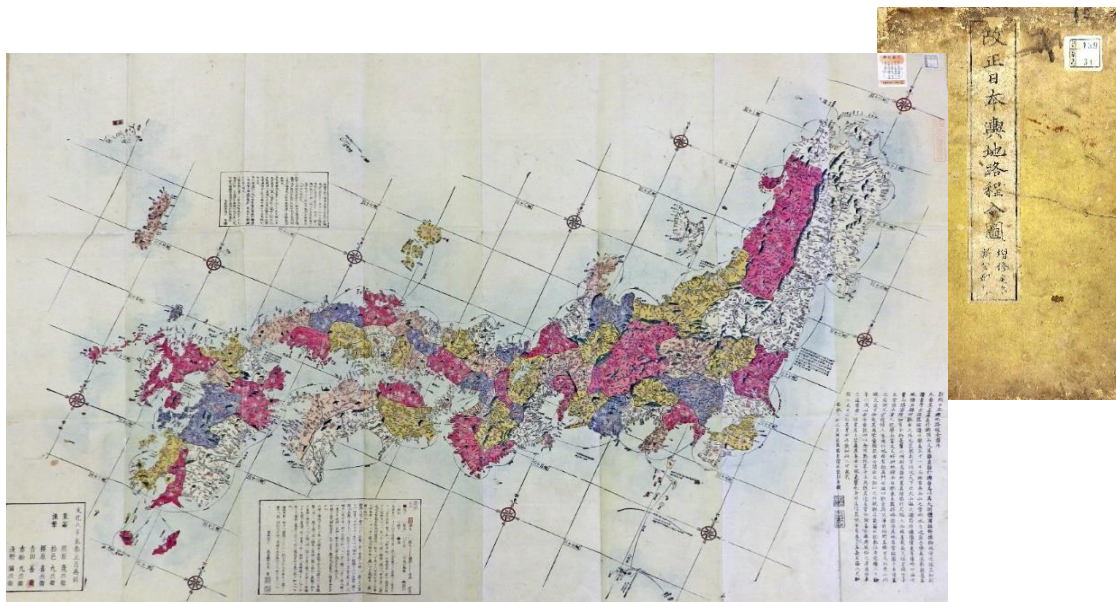
日本路程全図(大1234)

1. 長久保赤水「新刻 日本輿地路程全図」

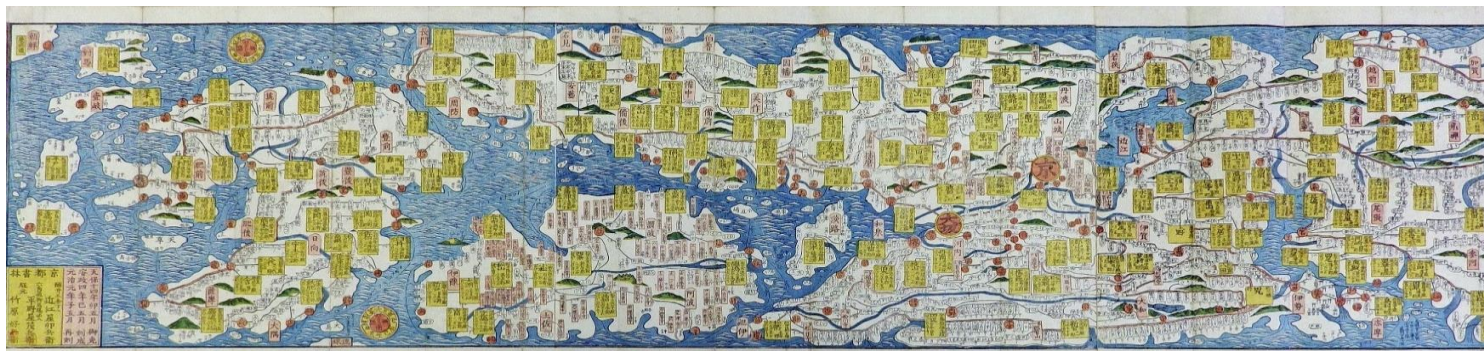
作者は長久保赤水(1717~1841)。常陸(ひたち)の地理学者で「大日本史」地理誌の編集に携わる。のちに紹介する「地球万国山海輿地全図説」などの世界地図を含めた多くの地図や地理書の著作がある。

「新刻日本輿地路程全図」は安永4年(1775)に完成した経緯度を施した最初の日本地図で、赤水図と呼ばれ民衆に親しまれた。津軽海峡が現在の地図とかなり近くなっている反面、蝦夷地はほとんど描かれておらず全体像が分からない等の特徴が見てとれる。

赤水自身も改訂を行なったが、下記史料は文化8年(1811)赤水死後に出版されたものである。同名の展示史料(13.9-42)とは大きさ等に違いがある。



新刻 日本輿地路程全図(13.9-34)



2. 林子平「三国通覽与地路程全図」

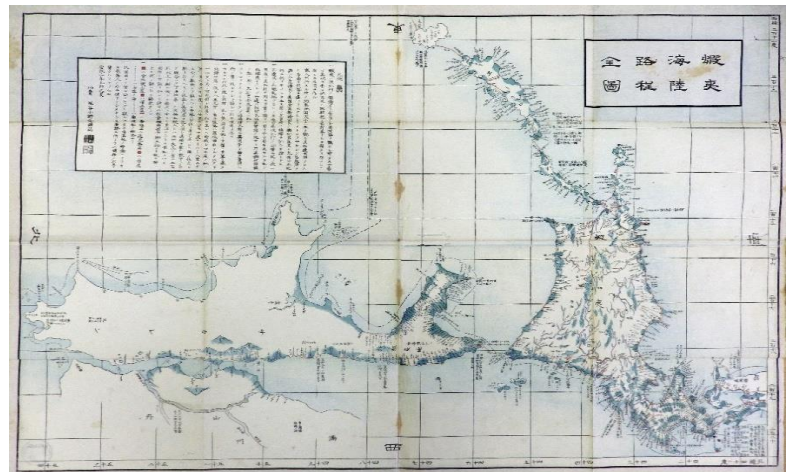
作者は経世思想家の林子平(1738~1793)。子平は北方海域におけるロシアの進出に注目して、天明5年(1785)に「三国通覧図説」を著し世論の喚起をはかった。この全図はその中の一枚と同図。ここでの北海道本島は南北に長く、松前と蝦夷地に色分けされており、樺太は大陸とつながっている。

また、ロシアの南下に刺激されて、江戸幕府は天明5・6年(1785・86)に蝦夷地を調査させ、新しい地図を作成している。それまでは想像や聞書で補い、蝦夷地が島であるか、大陸の一部であるか、どのくらいの広さなのか、全く分からなかったのである。以降は右図に見えるように蝦夷地はかなり正確に描かれる様になり、日本地図の中に蝦夷地が含まれ始める。

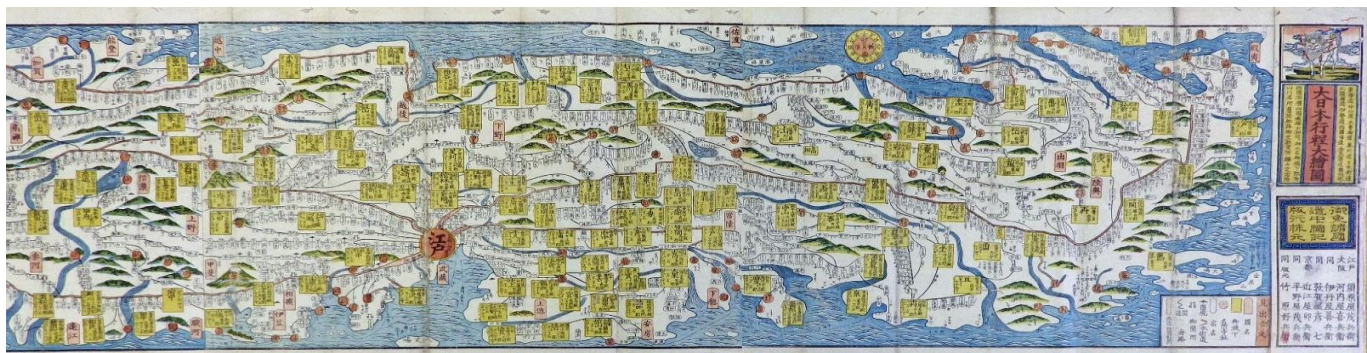
一般的に蝦夷地は蝦夷のいる地方をいい、この頃はアイヌ民族の居住地域である松前を除く北海道本島と樺太及び千島を指している。



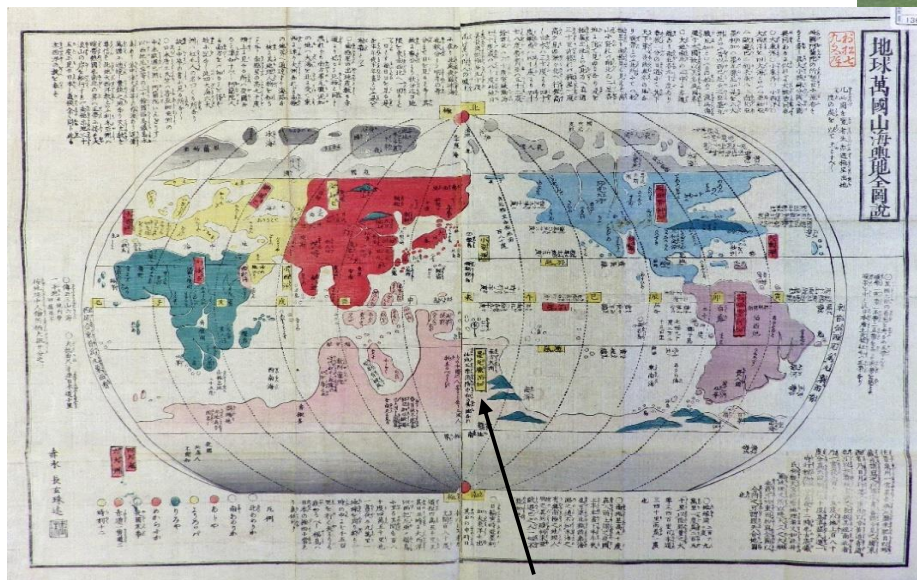
三国通覧与地路程全図(大1345)



蝦夷海陸路程全図(098.9-28)



大日本行程大絵図(大1244)



メガラニカ

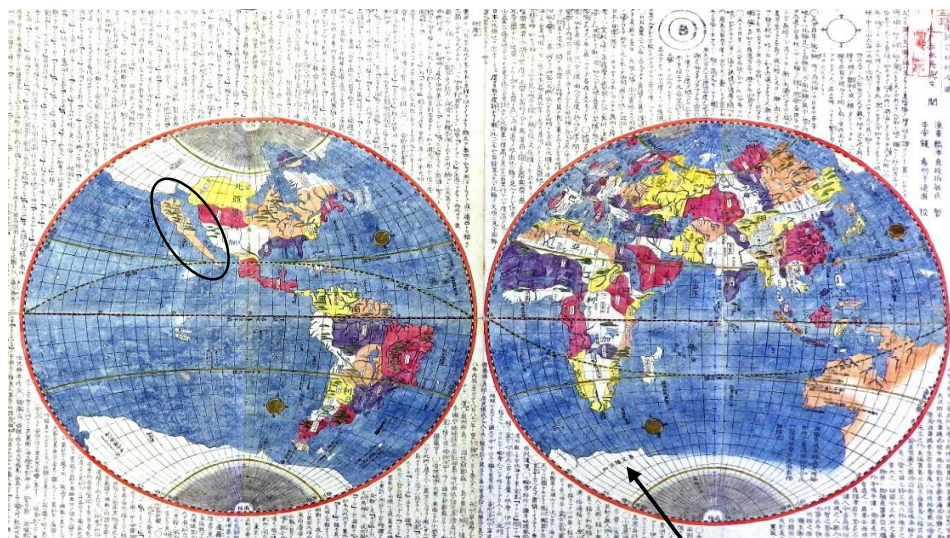


3. 世界地図

展示史料3点が今の世界地図と大きく異なる点は「メガラニカ(墨瓦蠟泥加)」と記載された大陸の存在だろう。これはオーストラリア大陸とは異なり、南極中心に想定されていた大陸であり、イタリア人在華耶蘇会士(ざいかやそかいし)マテオ・リッチによる世界地図で日本に紹介された。「地球万国山海輿地全図説」は、長久保赤水がそのマテオ・リッチの世界地図を基に作製したものである。

「啁蘭新訳地球全図」は寛政8年(1796)に作られたオランダ版世界地図の翻訳である。翻訳者は蘭方医の橋本宗吉(1763~1836)。才能を見い出され、援助を受けて江戸の大槻玄沢の芝蘭堂塾に学んだ後、関西における蘭学の基礎を築いた。各国の読み方などの記載が多くあり、カリフォルニアが細長い島で描かれている特徴などがみえる。また、この図にも校閲者として長久保赤水の名もある。

啁蘭新訳地球全図
(091.9-232)



メガラニカ



新訂地球万国方図(大1358)

嘉永5年(1852)の世界地図にはメガラニカはもう描かれていない。